

「本地ヶ原開拓記念碑」

愛知県尾張旭市南新町

愛知県尾張旭市は尾張中部に位置し、北西部は名古屋市と接している。名古屋市の衛星都市として発展し、現在の人口は約8万3千人で、工業・商業が盛んである。国道363号線(瀬港線)

沿いの本地ヶ原^{ほんじがはら}地区には戦前、陸軍演習場があり、戦後、緊急開拓のための集団入植地となった。

1945(昭和20)年から63年にかけての本地ヶ原への総入植戸数は188戸、うち定着戸数は148戸。入植者は軍需工場等の工員60戸、軍人33戸、商人19戸、農家19戸などで、うち18戸は海外引揚者だった。48年に本地ヶ原開拓農協が発足した。

入植地は台地で水利が悪かった。土壌は強酸性だったため、入植初期は開墾とともに土壌改良が必要だった。開拓者は麦やサツマイモなどの畑作に励んだが、農業経験が浅かったこともあり、収穫は少なかった。

土壌改良資材の導入により、55年以降、10ア当たり収量が既存農家並みとなった。野菜生産を増やし、特にスイカとハクサイは名古屋市などに出荷され、好評を博した。愛知用水が61年に通水し、水稲作も行われるようになった。

尾張旭市で唯一の集団農業地帯を形成していたが、後継者には他産業従事者が多かった。65年以降は住宅団地や工場などの建設により、農地転用が増加した。かつての農業地域の様相は次第に失われていった。

宅地や商業地としての開発が進み、現在、開拓地の面影はない。だが、開拓者の苦労や願いが忘れられないよう、本地ヶ原神社の鳥居の近くに開拓記念碑と開拓者慰霊碑が建立されている。記念碑は同開拓農協が66年に建立したもので、碑銘は「本地ヶ原開拓記念碑」。慰霊碑は02年、本地ヶ原連合実行組合によって建てられた。

記念碑の碑文の末尾には、「今 過ぎし日々を顧み 故人を偲び 無量の感懐なきを得ない ともあれ 相寄り 相援け合う 団結のみが最後の救いであったことを肝に銘じ 新たな意志を
漲^{みなぎ}らせ 開拓者一同の浄財を集めて ここに桑原愛知県知事の揮毫を得 この記念碑を建てる 次第である」と記されている。

「本地ヶ原開拓記念碑」

- ①調査日 2021年4月20日
- ②所在地 尾張旭市南新町中大田
- ③地区の沿革 昭和20年11月に軍用地が解放され、軍需工場の工員、軍事、復員者等150世帯が入植。入植地は台地で水利が悪く、土壌は強酸性だったため、土壌改良が必要だった。
- ④設置年月日 昭和41年11月20日
- ⑤設置者 本地ヶ原開拓農業協同組合
- ⑥碑名 開拓碑
- ⑦碑文（表面） 本地ヶ原開拓記念碑 愛知県知事 桑原 幹根 書
- ⑧碑文（裏面） その日 昭和二十年十一月二十日 敗戦という未曾有の衝撃を受け打ちのめされた悲運の中から 志を祖国再建 国土開発に樹て 全国各地よりこの地 本地ヶ原に集るもの百五十世帯 旧軍人あり 戦災者 復員者 離職者等 多彩な顔ぶれをもって緊急開拓措置法に基づき 不退転の決意を胸に 最初の鍬を打ち下したのである 爾来 雨に泣き風に苦しみ営々と力めてやまず 星霜二十年 田は稔り畑は豊かに輝き 昔の面影は何處にも見當らない 然し乍ら この間 伊勢湾台風を初め 自然の猛威に耐え 危機の数々を幾度か潜り抜け 曲折はあったものゝ問題は悉く解決を告げた 今 過ぎし日々を顧み 故人を偲び 無量の感懐なきを得ない ともあれ相寄り 相援け合う 団結のみが最後の救いであつたことを肝に銘じ 新たな意志を漲らせ 開拓者一同の浄財を集めて こゝに桑原愛知県知事の揮毫を得てこの記念碑を建てる次第である / 昭和四十一年十一月二十日 建立 本地ヶ原開拓農業協同組合 下段に入植者氏名
- ⑨現在の状況 本地ヶ原神社前で管理されている。



